

これまでイエスの受難と死、復活、そして前回「聖霊」の派遣(『ヨハネ』14章)についてご説明しました。きょうは『助っ人さま』、『神さまの思いが息吹となって吹いてくる風』(山浦玄嗣先生)である「聖霊」が、現実の中でどのように働いているのか ― をみていきましょう。

## 🔑 「聖霊」の役割とは

### イエスはいつ「再臨」するのか

復活したイエスは天の神さまのところへ戻ります(「主の昇天」)が、『ヨハネ』14章で読んだように『この俺は、お前たちを孤児にして、棄てたままにはして置かない。お前たちのそばに戻って来るぞ』と約束しました。これが「再臨」の約束です。

イエスはいつ戻って来るのでしょうか。それは「終末の時」です。「終末の時」には、神さまが創造した世界は何ひとつ欠けることがないものとして完成され、イエスが人間の裁き(いわゆる〈最後の審判〉)と救いの成就のために再びこの世に現れる ― という信仰がキリスト教にはあります。

そうすると人間は、「昇天」から「再臨」の時までしばらくの間イエスに会えないこととなります。ここで「しばらく」とは時間的にどれくらいのことなのか ― ということが問題にされました。辞書を引くと「しばらく」とは、「すぐではない」「少しの間」「ある程度長い間」…とあります。これに関してはたくさん考え方があり、激しい論争も起きました。詳しく書くとそれだけでこの回が終わってしまいますのでやめます。

そこで、どんなことが「終末の徴<sup>しるし</sup>」として起こるのかが『マルコ』13章に書いてありますのでみてみましょう。そこには、民と民、国と国とが敵対し(戦争が始まり)、地震や飢饉が起こったりニセのメシアや預言者が現れて人々を惑わすと書かれています(8~23節)。また、『太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされ』(24~25節)、そのとき『人の子(イエス)が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る』(28節)とあります。

また、『その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子(イエス)も知らない。父(神)だけがご存じである。気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである』(32~33節)と書かれています。

「終末の時」が訪れる前には戦争や紛争、大災害が起こったり、いかがわしい人物が現れ、自然は破滅的な災害に見舞われる…。しかし、私たちには「その日・その時」がいつなのか、イエスが「いつ再臨するのか」わかりません。最終決断者は「神」なのです。だから私たちは、『目を覚まして』いなければならないのです。

### 「聖霊」のはたらきとは

イエスは自分がこの世にいない間、「聖霊」=「助っ人さま」を遣わしました。私たちの毎日の生活において、聖霊はどのように働きかけているのでしょうか。なにを助けてくださっているのでしょうか。来住英俊神父の著書を参考にしながらまとめてみます。

## I 聖霊は〈イエスの現存〉を顕わす

私たちクリスチャンは、〈イエスはいつも私のそばにおられる〉、あるいは〈私のうちにいらっしやる〉ということ信じ、かつ、それを〈実感〉しています。

来住神父は『その感覚こそが、キリスト教信仰の神髄』だと言います。遠藤周作氏は多くの小説や随筆の中で、「同伴者としてのイエス」という言葉でそれを表現しています。

『わたしが・棄てた・女』を思い出してください。自分のカーディガンを買うために、毎日のように残業して貯めたお金を田口さんの奥さんにあげようか迷っているミツに、『この人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ。… 私の十字架はそのためにある』と、ささやいたイエス。

『沈黙』において、日本人信徒たちへの残忍な拷問と彼らの悲惨な殉教のうめき声に耐えきれず、彼にとって『この世で最も美しいもの、最も高貴なもの』であったイエスの顔が刻まれた踏み絵に足をかけようとする司祭ロドリゴに、『踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、おまえたちの痛さを分かたため十字架を背負ったのだ』と語りかけたイエス。

私たちといつも一緒におられ、ささやきかけてくださるイエス。私たちの悩みや苦しみを共に担ってくださるイエス。『そのイエス・キリストの現存を地上の私たちに<sup>あらわ</sup>顕してくれる』のが聖霊である — と来住神父は書いています。

## II 聖霊は人と神をつなぐ

イエスは弟子たちに、宣教において迫害され、ローマ総督や王の前に連れ出されたときは『何をどう言おうかなどとつまらない心配はするな。言わなければならないことはその時になると神さまが必ず教えてくださる。それというのも、お前たちが話すその言葉は、実はお前たちが話しているのではない。父<sup>とと</sup>さまがお前たちの口を通して話していなさるんだ』（『マタイ』10章19～20節）と語っています。「いざという時には、神さまご自身が弟子たちの口を借りて語ってくださるから心配することはないよ」というわけです。

また、『ヨハネ』16章13節には『真理の霊が来ると、あなた方を導いて真理をことごとく悟らせる』とあります。聖霊は、かつてイエスが語ったことの内容を弟子たちにしっかり理解させそれを宣べ伝える力を与えてくれたのです。

## III 聖霊は私たちを「導き」、「派遣する」

パウロが宣教旅行に出発しようとした時、『聖霊によって送り出されたバルナバとサウロ（パウロ）は、… キプロス島に向け船出し …』（『使徒言行録』13章4節）とあるように、弟子たちが宣教するために遠い場所へ行くとき、「聖霊に派遣される」という言い方が聖書の所々にみられます。

『然るべきところに「運んで行く」「連れて行く」ことは、聖霊の主な役割の一つのように思え』ると来住神父は書いています。一人の人間を、以前は考えもしなかった場所へ導き、思わぬ人々と出会わせ、結果的にはその場所に行き、人々と出会ったことがその人の人生にとって大きな意味を与えてくれる … そんなはたらきをするのが聖霊なのです。

第53回の〈標識〉の話をお出ししてください。私の10代中盤から教員時代をふり返って、いろいろな標識があったことを書きました。みなさんもお自分のこれまでの標識を考えていただけたかと思います。わたしは今、自分が歩いてきた道はすべて「聖霊に導かれた道」だったと確信しています。高校～浪人～大学時代前半までは、そんなことは考えもしませんでした。杉山<sup>よしむ</sup>好先生に出会って — 〈真のクリスチャン〉に出会って —、初めて芽生えたものだったと思います。でも当

時は、「もしかしたら、そうなのかな …」という程度のものでした。その思いが強められ、確信したのは洗礼を受けたあとでした。

浪人生活。獨協大学入学。失恋 …。屈辱的で、不本意で、後悔ばかり …。「なぜ・どうしてこの道なんだ …」と受けとっていた二十歳前後。当時流行った『青春時代』という歌にあるではありませんか。「青春時代の真ん中は 胸に棘さすことばかり …」。その歌詞に自分を重ねて、「悲劇の主人公」に仕立て上げていた時代でした。笑っちゃいます。その「棘」はとても痛かったけれど、その「痛み」を知ったおかげで少しは人間的に成長できたのかな … と思います。自分は気づかなかったけれど、きっと「神さまの息」が吹き込んでいたのです。

〈標識〉の話を読んでくださった、いつもこの『…塾』でお世話になっている教会のX先輩がメールをくださいました。Xさんは高校時代に結核を病まれ、3年間の療養を余儀なくされたそうです。青春を謳歌できるはずの時期の入院生活。その焦燥感、挫折感、絶望感、そして孤独さはどれほどのものだったでしょう …。しかし、病院の前が〈カトリック教会〉だったそうです。神父様や神学生の方との出会いがありました。Xさんは入院時をふり返って、次のように書いておられます。

『私の標識の裏側には「ようこそ、入院生活へ」と書かれていたのかな？ 「よく来たな、待っていたよ。」だろうか』。

「信仰」という〈恵み〉をいただいた方は、Xさんのような「受けとり方」ができるのです。Xさんが見た〈標識〉の「裏側」に書かれた言葉は、逆境のときにも、神さまは必ずたくさんのお聖霊を送り、共にいてくださり、一緒に悩み・苦しんでおられる — という真理を証するものではないでしょうか。

「人生、山あり谷あり」と、よく言われます。厳しい現実を考えると「その通りだなあ …」と思わざるを得ない出来事がイヤというほどたくさんあることも事実です。でも、人生の所々にある〈標識〉の「裏側」を見る、あるいは考えることができれば、多少右に、あるいは左に曲がったり、裏道に迷い込んだり、時にはバックすることもある、それこそ紆余曲折の道だけれど何とか歩いて行けるんじゃないか … なんて考えているわたしです。だって、〈聖霊〉が導いてくれているのですから。イエスが一緒に歩いてくださっているのですから。「無意味な行程」なんてあるはずがありません。「山は山として、谷は谷として歩いて行く」ことで、私たちが人生の奥深さや生きる意味を知るように、神さまは配慮されているのかもしれない。

#### IV 聖霊は人間に熱意や勇気を与える

「聖霊に満たされて ～ をした」という表現も聖書によくでてきます。『その人の本来とは思えない熱意とか勇気とかを発揮する場合』に使われると来住神父は書いています。前回ご紹介した「聖霊降臨」の出来事を思い出してください。この出来事は、イエスが逮捕されたとき『イエスを見捨てて逃げてしまった』（『マタイ』26章56節）ような弟子たちが、のちにイスラエルだけではなく多くの国々を渡り歩き、すさまじい迫害を受けながら殉教を覚悟で宣教活動を始める決定的なきっかけになりました。後のキリスト教ではこれを「教会の創立記念日」と見なして、「聖霊降臨日」あるいは「聖霊降臨祭」と呼んでいます。「弱虫だった弟子たち」（遠藤周作氏）が「大変身」し、命がけで「キリスト・イエス」を証する力を聖霊が与えたのです。

#### V 聖霊は人を慰め、励ます

『讚美歌 / 讚美歌第二編』という本の中に、「聖霊」を歌う曲がいくつかあります。その中から、聖霊の働きをズバッと表わしている歌をご紹介します。

- 【177】 1 かみの氣息よ われを医やし 疲れしころを つよめたまえ  
2 かみのいきよ われをきよめ みかたちの如く ならせたまえ  
3 かみのいきよ われに満ちて みころを常に なさせたまえ  
4 かみのいきよ われを活かし み側をはなれず おらせたまえ

1番の「かみ(神)の氣息」という歌詞が、聖霊とは神さまの「思い」であり「息(息吹)」であることを見事に表現しています。「医やし」は「癒し」でしょうから、「病気や傷、苦悩などを治したり、やわらげたりしてくださる」ということでしょう。また、日々の疲れた心を「大丈夫、わたしががついているから！」と励ましてくださるのが聖霊だと歌っています。

2番では、私たちをこの世の悪や自分のエゴから清め、『神は御自分にかたどって人を創造された』(『創世記』1章27節)と言われる在り方にしてくださいという願い。3番では、神さまの思いは私たちをいつも包みこみ、その思いを私たちが毎日の生活の中で言動に表わすことができるように力を貸してくださいという神さまに依り頼む心情。4番では、私たちが幸せに生き活きと生きるために、いつも私と一緒にいてくださいという祈りが歌詞に込められています。

カトリックにはたくさん「祈り」があります。その一つをご紹介します。(すべての信者さんたちがこれを祈っているわけではありません。「こんな祈りもありますよ」と、示されているものです。)

#### ✦『朝の祈り』

新しい朝を迎えさせてくださった神よ、  
きょう一日わたしを照らし、導いてください。  
いつもほがらかに、すこやかに過ごせますように。  
物事がうまくいかないときでもほほえみを忘れず、  
いつも物事の明るい面を見、最悪のときにも、  
感謝すべきものがあることを、悟らせてください。  
自分のしたいことばかりではなく、  
あなたの望まれることを行い、  
まわりの人たちのことを考えて生きる喜びを  
見いださせてください。アーメン。

私たちはこのような祈りを唱えて(あるいは心の中で思い)、神さまからいただく大切な一日のスタートを切ります。「神さまの息(息吹)」を身体いっぱいを受けながら。

今回は、「神・イエス・聖霊は別々の存在ではなく、〈ひとつ〉」だ — というお話を書く予定です。(どうしよう …、書けるかな …。)

【引用・参考にした書籍】 ・山我哲雄 『キリスト教入門』 ・新共同訳『聖書』

- ・森 一弘 『キリスト教入門 Q&A』 ・『岩波 キリスト教辞典』
- ・山浦玄嗣 『イチジクの木の下で (上・下巻)』、『ガリラヤのイエシュー』
- ・『讚美歌 / 讚美歌第二編』(日本キリスト教団出版局、2008)
- ・遠藤周作 『沈黙』、『わたしが・棄てた・女』
- ・来住英俊 『『ふしぎなキリスト教』と対話する』(春秋社、2013)